様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　１日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７３０１２２
研究課題名（和文）　国際安全保障における地域枠組みと信頼醸成措置－OSCE プロセスの再検討を中心に
研究課題名（英文）　Regional Framework and Confidence Building Measures in International Security - Re-examining the OSCE Process

研究代表者
坪内　淳（TSUBOUCHI JUN）
山梨大学・教育人間科学部・准教授　　・
研究者番号：６０３０３３９３

研究成果の概要（和文）：国際政治の根幹的テーマである戦争と平和について、アナーキーと不信の体系を前提としつつ、信頼醸成措置（CBMｓ）と認識共有あるいは規範浸透過程の複合的プロセス（地域枠組み）構築の観点からアプローチし、冷戦期欧州での経験がいかに普遍化されうるかについて検討した。具体的には OSCE での信頼醸成措置をめぐる地域枠組み形成過程の検証と、比較事例としての東アジア地域での可能性について展望した。

研究成果の概要（英文）：Re-examined the OSCE process and its confidence-building measures. Maintained CBMs should be conceptualized along with the process of mutual perception and norms pervading in regional frameworks; and, as such, possibly applied to other regions than Europe. (Ex. East Asia) This research aimed to focus on the war and peace and the anarchy and distrust -the central theme of international relations- by developing the idea of CBMs and refining the regional approach in IR.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	0	1,300,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	570,000	3,770,000

研究分野：国際関係論
科研費の分科・細目：政治学・国際関係論
キーワード：安全保障、信頼醸成、ＯＳＣＥ、地域安全保障枠組、外交政策、地域安全保障複合体

１．研究開始当初の背景

(1) 国際政治学はその誕生以来、アナーキーを原理とする国際関係において、「なぜ戦争が起こるのか」そして「戦争はいかに防がれうるか」を中心的な命題としてきた。（リアリスト学派とリベラリスト学派の系譜とその間の論争、覇権、抑止、同盟、相互依存、集団安全保障、レジーム等の諸概念の検討。）

冷戦直後の一時的な高揚感がおさまった後、この国際安全保障をめぐる諸議論は、流動化著しい現実世界の要請に応え、また新しい理論的取り組みを加えつつ、あらたな段階を迎えつつある。
(2) 研究代表者は、このような国際関係における安全保障の考察の根本に「不信」の問題を据え、具体的には信頼醸成措置（CBMs; Confidence-Building Measures）概念を中心に、欧州の地域的な安全保障の展開、および比較研究対象としてのアジア地域を事例として、国際安全保障の理論的、実際的検討を試みてきた。
(3) そもそも信頼醸成措置は、OSCE(欧州安全保障協力機構)プロセスを中心に、冷戦期には軍事演習の事前通告やオブザーバー招聘、査察など諸措置の漸進的展開によって偶発的な軍事衝突の可能性を軽減させることから始まり、軍事情報の継続的な透明性確保と多国間交渉の制度化が急速に進むことで、欧州地域安定を担保するメカニズムとして確立されたものである。この概念は冷戦後、他地域に応用しようとする動きが活発となり、日本周辺においても取り組み等が続けられている。
(4) しかし、冷戦後１０数年を経ても、欧州以外では、これらの措置は地域の平和と安定に実質的な成果をもたらしているとはいえず、これらの措置はきわめて限定的な効果しか持ちえていない。それはなぜだろうか。信頼醸成措置は、欧州あるいは冷戦の文脈においてのみ有効性を持ちうるものであったのか。
(5) 研究代表者は、国際政治の新しい理論的潮流、とくに規範、認識的側面を重視するコンストラクティビズム、およびグローバリズムとパラレルに生じつつある地域主義（リージョナリズム）をめぐる諸議論の恩恵を受け、次のような論点に至った。
(6) すなわち、現在の安全保障研究における信頼醸成措置の一般的理解にはそもそも重大な「欠如」があるのではないか。これが克服されれば、信頼醸成措置の概念は、国際安全保障の重要なキー概念として再生する可能性がある。
(7) この問題に取り組むため、本研究は、信頼醸成措置の発展経緯を「軍事的透明化」と「認識共有」の二重プロセスとして理解する必要があること、また、それが地域的安全保障枠組みの形成と密接不可分の関係にあることを論点として展開する。

２．研究の目的
(1) 欧州での信頼醸成措置の発展が、軍事的透明化だけではなく、認識共有（あるいは規範浸透）過程を含めた複合的プロセスとして理解、再定義されるべきであることを明らかにする。
(2) 欧州の地域安全保障枠組みの確立における信頼醸成措置の役割について、信頼醸成（措置）の理論的な先行研究の検討と並行しつつ、地域安全保障概念の理論的考察を行う。この点では、イギリスの国際政治学者ブザンらが提唱する regional security complex（地域安全保障複合体：RSC）の概念や一部コンストラクティビズムの理論を援用して検証する。
(3) 地域安全保障枠組み構築と信頼醸成措置の展開プロセスの不可分性について検討を進め、この議論がどの程度、欧州という地域的特性、あるいは冷戦という時代的背景をこえた、一般的命題となりうるかについて論及する。
(4) 本研究の特色は、第一に、信頼醸成措置という古い（あるいは「あきらめられた」）概念を新しい文脈・理論枠組みのなかに再生させ、第二に、とくに我が国では研究の進んでいない地域安全保障に関する研究、とくに regional security complex 概念およびその関連諸研究を援用し、そして、これらの諸議論をむすびつけることで、国際安全保障の分野における地域安全保障の概念とその検討枠組み、具体的検証のツールとしての信頼醸成措置概念を提起することである。
(5) 現代の国際政治において、グローバル化の進展と軋轢のなかで、地域概念がきわめて重要な位置を占めるようになっていることはすでに指摘されてきているが、本研究は、地域研究の一環としての欧州安全保障動向を追うのではなく、国際政治・国際安全保障の重要な検討課題として「地域安全保障」概念を捉え、安全保障の理論的分析への貢献も視野に入れた研究を目指す。
(6) これによって、国際政治理論的には、あらたな段階にある国際安全保障研究の潮流に貢献するだけでなく、実際面においても、とくに地域の不安定化が急速に高まっている日本周辺における（またこれまで有効な地域枠組み構築の可能性が悲観視されてきた）地域安全保障メカニズムの検討に重要な議論の指針、あるいはそれに関連した学術的考察においては理論的検討の土台となるものを提示できるであろう。

３．研究の方法
(1) 信頼醸成措置の発展、概念化に関する先行業績を包括的に整理する。とくに「軍事的透明化」だけはなく「安全保障認識の共有過程」に関する研究を中心に拾い出し信頼醸成措置＝複合プロセスという観点から考察する。
(2) 欧州信頼醸成措置の展開の詳細を再検

討する。具体的にはＯＳＣＥプロセスにおいて（信頼醸成措置のテクニカルな発展の経緯を追うのではなく）信頼醸成措置をめぐる交渉枠組みの形成、他の分野での交渉との関連、あるいはＯＳＣＥの枠組み（機構・交渉過程）の外での欧州安全保障動向の影響もふくめた検討を行う。
(3) およそ５年ごとの時期に区切った OSCE 交渉過程を、先行研究と OSCE ニューズレターやウェブサイトに保存されている内部文書などによって分析し、文献で不足する事項については、現地での聴き取りおよびＥメールによる現地専門家との意見交換などを行う。
(4) OSCE 機構内の安全保障専門家、また OSCE 交渉担当として常駐する各国の外交・安全保障担当者にインタビューを行う。公式会議の意義についてだけでなく、とくに常駐交渉担当者による OSCE 関連の各種会議の内容、それに対する各国担当者の評価を中心的に聴き取りする。
(5) ここでは、公式記録やそれに基づく研究論文にはなかなかあらわれない、交渉担当者（および政府の外交安全保障関連の政策決定者）の思考・判断過程についての直接的な意見聴取が重要な意味を持つ。なぜなら交渉の制度化によるアクター間の「安全保障認識の共有過程」においては、交渉現場での具体的な言動、各国交渉担当者間の非公式なやりとりなどの微妙かつ注意深い検討を要する要素が、その分析のための視座として不可欠だからである。
(6) パリ政治学院、ストックホルム国際平和研究所、コペンハーゲン大学などの関連欧州研究機関において、研究者の視点から欧州地域安全保障枠組みにおける信頼醸成措置がどのように評価されているかを聴取し、また同概念による地域安全保障枠組の検討という本研究の方向性と意義について意見交換を行なう。
(7) 欧州安全保障における信頼醸成措置および OSCE、地域安全保障については、研究代表者にこの分野で相当の研究蓄積および関連研究者との交流実績があることから初期段階での作業が効率的に進められることが予想される。たとえば、これまでにも欧州等の国外の研究者から研究代表者の信頼醸成措置研究についての照会と意見交換もあり、面会のみならずＥメール等を活用した彼らとの積極的で継続的なやり取りによって（これまでの研究の焦点を拡散させるのではなく）議論の方向性を多面的かつ客観的に評価のうえ精緻化し、本プロジェクトで追究すべき論点を絞っていくこととする。
(8) 並行して、国際政治理論研究、なかでも regional security complex などの地域枠組に関する理論等について、その批判的検討を通して本研究の理論的基盤を確立する。理論研究など関連領域について、やみくもに意見聴取を行うのではなく、「研究ハブ的人材」ともいうべき、国内外の何人かの専門家を選択、活用し、効率的な意見交換、議論を目指す。
(9) 規範構築、制度論、regional security complex などの新しい理論動向や、近年の地域機構や枠組みの展開やその理論的検討などの関連研究をさらにすすめ、これらがいかに信頼醸成措置と地域安全保障をめぐる本研究に応用されうるかについての考察を行なう。
(10) また以上のような作業を通して、信頼醸成措置概念を国際安全保障におけるキー概念として再構築することを中核に据えたこれまでの研究をまとめ、それを基盤としつつ、とくに国際安全保障の新たな潮流を視野に入れた次段階の研究へと発展させる道筋を確立させたい。

４．研究成果
(1) 「信頼醸成措置の普遍的理解は可能か（妥当か)」との問題意識を背景に、国際政治の新しい理論的潮流、とくに規範、認識的側面を重視するコンストラクティビズム、およびグローバリズムとパラレルに生じつつある地域主義（リージョナリズム）をめぐる近年の諸議論等を援用し、信頼醸成措置を国際安全保障のキー概念として再構築させることに取り組んだ。
(2) 具体的には、欧州での OSCE プロセスの理論的検証を、地域枠組みと信頼醸成措置の観点からさらにすすめるともに、他地域での地域安全保障枠組み構築を比較事例として検証した。日本周辺の東アジア地域を主たる比較検討対象とした。
(3) また、信頼醸成措置概念の、ポスト冷戦後期の国際政治における理論ツールとしての有用性などを分析した。関連して、国際安全保障に関する諸議論の動向について広く考察を行い、とくに近年の、地域枠組みと国家の役割をめぐる新たな理論動向について検討を進めた。（これについては、国際関係論における国家概念の考察として、共著を執筆、近刊予定。）
(4) 具体的には、地域安全保障複合体（ＲＳＣ）概念や近年提起されている安全保障アーキテクチャ論などを中心に、その概念的整理と批判的考察、および、とくに日本周辺地域の国際安全保障における、それら諸概念の適用妥当性を、アメリカ、欧州、豪州等の最新の研究動向をふまえつつ検討した。
(5) また関連して、地域安全保障枠組みへの関与という観点から、とくに冷戦終結以降の日本の外交安全保障政策についても考察し

た。（この成果はすでに学会誌論文として発表したが、さらにこの発展的論考として、日米同盟との関連について論じた論文を執筆した。）
(6) この過程では、アジア経済研究所の地域安全保障メカニズムに関する研究会等で、問題意識を共有する研究者から、詳細かつ重要な知見を得、また理論的検討についても討議を重ねた。（この成果は中間報告として０９年３月に発表、さらに１０年９月頃にRSC概念の理論検討と発展的考察を、最終報告として研究叢書が公刊される予定。また、１０年秋の日本国際政治学会部会企画として、報告予定。）
(7) RSC 概念等については、コペンハーゲン大学オール・ウィーバー教授等に詳細なインタビュー、意見交換を行うこともできた。これにより、地域枠組みをめぐるこれまでの諸議論の整理、最新研究動向についての考察のみならず、安全保障概念等のさらなる多面的な検討など今後の研究展開につながる重要な示唆を得た。
(8) これらの作業により、冷戦期とくに欧州地域安全保障のなかで提起された信頼醸成措置概念について、その時代的、地域的特異性を超えた理解の基盤を形成し、現代国際関係における意義を確認するとともに、その具体的な応用の展望について、いくつかの重要な知見を獲得することができた。これらの集大成として、国際安全保障における信頼醸成措置概念と地域枠組みの包括的な検討について単著の公刊にむけた準備を現在行っている。
(9) さらにこの３年間の研究を通して、信頼醸成措置概念を現代の国際安全保障研究にいかに位置づけるかという大きな問題意識に重要な区切りと知的突破点を得たことで、これを次の研究課題へと昇華、発展させていく作業を進展させている。
(10) 具体的には、ポスト冷戦後ともいうべき新たな状況の中で、国際政治の新基軸として「地域」概念が（再）浮上しつつある。地域という切り口は、これまで国際安全保障の分野では学術的な検討が手薄であった。そこで、安全保障の地域メカニズムの理論構築のため、Regional Security Complex 概念を批判的に検討しつつ、ここに、信頼醸成プロセスの研究成果を加味し、新しい地域メカニズムの普遍的理解を形成していくというような研究の方向性を検討中である。加えて、国際関係における安全保障概念、あるいは主権国家概念、また、これらの問題関心を実際的な課題と結びつけた、ポスト冷戦後期における外交安全保障政策の検討等（とくに日本の地域安全保障への関与と日米同盟）を、今後の研究課題とする。
(11) このように、本プロジェクトによって、当初の研究課題の達成のみならず、新たな研究の方向性をも視野に入れた幅広い研究活動を展開することができたことに感謝したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 坪内淳、「日米同盟の『失われた２０年』」『軍縮問題資料』、２０１０年７月号、24-35、査読無
② 坪内淳、「Regional Security Complex 概念に関する基礎的考察」『国際安全保障における地域メカニズムの新展開』、アジア経済研究所、3 月、2009、1－15、査読有
③ 坪内淳、「国際関係における越境問題の位相-日本の外交安全保障政策アジェンダ・セッティングの根本的誤謬」『公共政策研究』、日本公共政策学会誌、第７号、2007、73－82、査読有

６．研究組織
(1)研究代表者
坪内淳（TSUBOUCHI JUN）
山梨大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：６０３０３３９３

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし